

郷土作家 倉田百三「都の友に」ほか  
資料紹介

解 説

磯 貝 英 夫

倉田百三は、明治三十七年に広島県三次中学校に入学し（叔母の家に寄宿。）、途中、三十九年に一年休学して、四三年に同校を卒業している。かれが、第一高等学校時代に、「一高校友会雑誌」にのせた文章は、「愛と認識との出発」のなかに収められていて、よく知られているが、かれは、この三次中学時代にも、すでに、かなりの文章を書いて発表している。それらは、主に、三次中学校校友会雑誌「巴峽」、および、同校内の回覧雑誌「白帆」にのせられているのだが、これらについてはすでによく調査されていて、講談社の『現代日本文学全集46』のなかの辻橋三郎氏作製「倉田百三年譜」にも、詳細に記録されている。念のため、いま、それを表示すると、次のようになる。

明治三十八年（三次中学二年生）

「事は忍耐勉強にあり」（『巴峽』第九号、四月）

「春宵一刻」（『白帆』第六卷第三号、五月）

明治三十九年（中学三年—休学）

「夏の間」（『巴峽』第十号、一〇月）

明治四〇年（中学三年）

短歌六首

（『巴峽』第十一号、九月）

明治四一年（中学四年）

「呪ふべき星童主義」

（『巴峽』第十二号、七月）

明治四二年（中学五年）

「新緑」

（『巴峽』第十三号、九月）

鏡点英文和訳「アープと馬」

同

短歌七首

同

注1 辻橋年譜に、四二年に「日本現今の情勢と教育方針」とい

う文が入られているが、これは他人の文章で、あやまり

注2 「白帆」は、現在、三次高校にはこの一冊だけ保存せられ

ている。和紙、全員墨書、絵と写真が数葉はさまれており、

百三より三年上の中村憲吉が、小説・随筆・短歌をのせてい

る。

注3 百三は、これらに、紫水・百奴などの号を使っている。

以上のほか、明治三十九年九月の「秀才文壇」第六卷第十九号に、百三の投稿文三編「都の友に」・「燈台守」・「桔梗の花」がのっているの

を、最近見つけることができた。それで、ここでは、その三編に、「巴峽」の二編を加えて紹介する。

倉田百三の、これらの、中学時代の文章は、全体として決して個性の強いものではない。まずは、平均的な秀才文と言ってよいだろうか。独自性よりも中学生としての一般性が強いわけで、これは、一応、年齢の自然と言うべきだろう。しかし、よく見れば、後年に貫流する倉田的感傷性がすでにここにいちじるしいのを知ることができるし、この時期のかれの成長ぶりもうかがわれて、興味がある。

中学二年時の「事は忍耐勉強にあり」は、表題の示すとおり、いかにも中学生らしい、倫理的な文章である。おなじ年の美文「春宵一刻」は、おそらくこういうもののはじめての執筆かとも思われるが、「美人の天気処女の風うららかなる春の日や実に宜なるかな面を吹いて寒からず揚柳の風とは、」というおもしろい文章ではじまるもので、あとに、次のような朱筆の評が書かれている。

「句句の間章段の間往々にして前後呼応せざる処ありて散漫の誹を免れ能はずと雖時に佳句麗語の賞すべきものなきにあらざ一再の鍛錬を経ば読むべきの文とならん」

これにくらべると、翌年の、ここにのせた「秀才文壇」誌上の三文と「夏の曙」とは、まことに進境のいちじるしいものがあると言ってよい。特に、「夏の曙」の後評には、「文の光彩に射られて記者は朱筆を投じぬ」とあり、「春宵一刻」の評と読みくらべるとおもしろい。この年の文章には、明らかに、蘆花の『自然と人生』の影響が顕著であるが、この種の美文として、これらは、かなりよくできたものといえるだろう。

この三九年という年は、かれにとって、少年期から青年期への飛躍の年であったようで、都会風俗へのあこがれと文学への耽溺によって、一

年休学して、尾道の姉の家に身を寄せたという。その「文学」がどういうものであったかが問題であるが、それを、この四つの文章はほぼ想像させてくれるわけである。そして、こういう、感傷的美文を中心とする文学意識は、当時の文学青年にはば共通のものであったと言ってもいい。

この一年休学という事態は、一高時代以後のかれの大きな動揺彷徨の走りのようなものを感じさせるが、これらの作品を読めば、それは、とりわけて内面的な根のあるものでもなかったらしいことがわかる。復学後の「呪ふべき星董主義」が、たいへん健全で、常識的なものであることも、それで理解できる。

だが、ここには、自分のなかの星董派的な感傷性を否定しようとするモチーフもあったと考えられ、そこに、一つの精神の劇を見ることができるとも、この前後には、明星調の短歌も発表していて、それは、劇というより、精神のバランスをとったという程度に考える方が実態に近いであろうが、この問題が、やがて、高校に入ってから、姿をかえて、もうすこし深酷なたちであらわれてくるのを、私たちは見るようになるわけである。

ともあれ、私たちは、これらの文章の上に、歴史的な青春の書「愛と認識との出発」の前史を見ることがするのである。

「巴峽」と「白帆」の披見には、三次高校教諭楠文春君の世話になった。記して、感謝の意を表する。

都の友に

広島県立三次中学 倉田百三

懸花筒の桔梗の花紫に匂ふ寢覺の窓、欄を繞る残月の淡明りに、懐かしき君が麗はしき水琴の跡を辿りて、紙上に玉走る眞情の露を掬し申し候。

迦闌の丘に訣別の涙を揮ふて已に三星霜、岩瀬川の長堤に響く汽笛の一聲、彷彿ふ烟の名残を止めて、雲隠れにし君なき窓の夜半の月、如何に寂びしく候ひけん淡路しま通ふ千鳥の啼く聲は狭霧の影に幽けくして、月白き夜、懐かしき君が清秀の英姿の幻影は、夜半の夢に我が狐杖を訪れて、縹渺の裡に君と語りしことも候ひしが、今や幻を素の現に、かえして、同窓の友數輩、一穗の青燈に君を圍んで、興ある都の話しに鬱を拂はん日の近かるべきを想ひて、歡喜の情は滾々として胸裡に溢れ申し候。

馬車の軋音、工場の笛聲、煙突の濛烟、萬丈の紅塵裡に汲々たりし君の、砂漠を旅する客の緑地に瀟望するが如く、日夜憧憬れ給ふ故郷の美しき景色を、水なき里の小川の水車の廻はらぬ筆の穂先に秘めて、いざゝらば君の膝下に奉らん哉。

君よ、懐かしき君よ、暫し君が幽麗なる想像の翅に乗りて三年ぶり、思出多き我が書齋の欄に倚れよ、欄に倚りて清浄絵の如き山川の景色を眺め給ふべし。

緑色濃き青葉山、鳥居寂びたる鎮守の社、長蛇蟠る巴橋、森、畑、畷、茅屋、炊煙、など慕郷の念に燃ゆるが如き君が眼のレンズに映じては、いづれか思出の種となり給はざるべき。満目の緑野を貫ぬきて、一縷涼

々たり銀蛇の流、水輪早瀬にたばしる波路を蹴立て、舟一葉あり。

君よ想ひ出多からずや、今し白薔薇くづる、波音と和して、寂びれし空気をふるはしつゝ、優しき歎乃の波を這ふは、三巴名物と謡はれし、與作爺が自慢のそれにて候。

ハモニカの聲響く松原三里、狭霧の影に見えつ、隠れつ、畦を行く農夫のかつげる鋏尖の朝日に輝やきて見ゆるも興あるべく候。キイ、キイ、と緩るやけき軋音を響かせて、絶えずザアザアと白雲を吐く水車の幾廻りに、紅薫じ来る東の空、流るゝ朝雲絢爛として、森燃えぬ、野燃えぬ、畑燃え橋燃え紅色森羅萬象に流れて、川を昇る白帆も薔薇色に染みぬ、鎮守の森を飛び出でし鷺一羽、天そゝる泉法寺の塔の上に輪を畫きしが、忽ち流れて矢の如く、金色の光を羽にふくみて、曼々たる羽音は南の空に消え申し候。かくの如き幽嚴の風色の、塵飛び狂ふ都の巷に見得べく候ふか、決して、決して、と三度叫びし我は、坐る自慢の鼻の高きを覚え候。君よ、蘆荻露白き小川の邊、朝顔の花咲く離の外にたゞずみ給はゞ、機織る簞の、ちやんからからと共に美しき優しき歌聲の、緩るやけき音波の刺撃に感じて君は恍惚たるべく候。君よ歌聲の主を誰れと思ひし給ふぞ、暫らく秘めて我は言はじ、只、色白く豊頬の林檎色湛えし麗はしき凹みの愛嬌溢ふれて、都の空仰ぎては指かゞのふ乙女とのみ知り候ふべし、書き終はりて筆を投げつ、顧みれば蜘蛛の糸引く白壁に、細く幽き落書の跡ノ紀念多からずや君、歸れ疾く、疾く、疾く、

(明治三九年九月「秀才文壇」六卷十九号、日用文第三賞)

燈 臺 守

一 広島県立三次中学内 倉田 白幻

淡路島通ふ千鳥の啼く聲は幽に狭霧の影に淡れて、靡ろにかすむ海原の、男波女波の須磨の灘、波千里、月萬里、烟波は匂ふ斷崖は白薔薇くづる、波の花を散らしつ、遠く近く絶え間なく、崖うつ波音涿々として悲愁の枕に落つ。熱涙滂沱たる衾の中、胸に沸き来る怨恨の情、憤怒の想にかられて幾度か、惱みつ、悶えつ、絶え難なの憂愁を空吹く風に拂はんと、衾を蹴り、窓を推して、涙點々たる眼に遠き波路を眺めぬ。百尺の燈臺、夜氣水の如し。噫血涙玉走る我が袖に吹くか無情の夜半の風、波音高く海は寂びれて一輪の日光、夢よりも淡し。

二

流れ清き吉野川の傍、鑿の香失せやらぬ檢の扉、白壁の家、麗はしき薔薇の花垣の下、乳母車に可愛き夢圓かに結びつ、頬の凹みの美しかりける我の、噫思はざりき思はざりき、白沫岩を嘔む所、絶海の孤島の燈臺守となりて、一塊の襦袢を身に纏ひ、泣き、悶え、恨み、悲しみて、秋風落魄として空しく波路の月に泣かんとは、紫匂ふ葦の花に、優しき雄蕊雌蕊の甘き快樂の夢に、憧憬る、胡蝶の翅に、ざりとは荒き雨よ風よ、空想の花空しく現實の嵐に散りて光明は戀じて暗黒と化しぬ。噫、青春の夢残りなに消え果て、惜しめ共、惜しめ共、時の流早くして春や昔しの春にはあらし。

夢か夢に非じ、幻か幻に非じ、天言はず、地語らず、心なの風空しく松の梢に愁悵の楽を奏で、沈める空は月色暗く、須磨寺の鐘聲かすかに、殷々として水を渡りて響くのみ。

三

忽如ノ燦爛たる舷燈の光は、向ふに霞む狭霧を透して輝きつ、渺茫たる波路をスクリウの蹴るにまかして、數頭の網罟を舷に畫きつ、徐に進み來りぬ。

右に左に青く紅く閃々として回轉する我が燈臺の光に、航路を定めつ、濛々たる白烟を空に吐きて、沖を廻りて眞一文字、はるけき山影に隠れしが、臆がて玲々たる汽笛の響は、餘韻を水に流しぬ。噫、汽船は障りなく港に着きける也、我は言ふべからざる快感の胸裡に溢ふれて結ばれし惱みの淡さしを覚えぬ。

烟を残し、烟を吐きて往く舟、來る舟の危き船路の暗冥に唯一の光明を與ふる我が職務の、重く、清く、榮あるを我は今更に感じぬ。

月傾きて、漂渺萬里の波白し。淡靄揺曳する山の端に、燦爛として輝やく星一つ、何等神秘の黙指を我に囁かんとはするか。

四

月澄み、星瞬きて、濱の松風涼しく神秘の譜を奏する此處淡路島の千丈の巖角、夜は更けて萬籟寂として松葉を傳ふ白露の小々音幽けき時、窓を開き欄に倚つて、清淨神の如き天地に對す。

清いよく澄みて神靈の囁き那變よりか幽けく耳に入らん時、我魂恍

惚として躰を離れ、現實の羈絆を解脱し、月と語り、星と見えて糊糝たり、漂渺たり、幽嚴なる自然の情こころと同化し去りて、魂は飛びぬ天空十萬三十里星の錦。樂しからずや、天地を枕衾として、清風皎月の間に起臥す。露に眠り、風に覺めて五星霜、且に幽嚴の日の出を仰ぎ夕に燦爛の星斗を眺む。苔蒼き巖頭に立ちて日に嘯ぶけば、木葉を渡る蠅々の首愈冴えて、波の花散る巖下には、玲瓏清き「神秘の譜」。

## 五

一度光明失ひたる我は、更に／＼清く麗はしく明らかなる光明を漂渺の裡に認めたり。噫、幸深かき我なる哉！白沫岩を嘯む所、絶海の孤島の燈臺守てふ境遇に安んじて、只管清き冥想に耽らん哉。

涼風爽然、胸裡の亂麻を拂ふて、塵心洗ふによし汀の白波、空には星斗愈／＼澄みぬ。

(明治三十九年九月「秀才文壇」六卷十九号、美文秀逸)

## 桔 梗 の 旗

三次中学 倉 田 白 幻

本能寺暗揺れて飛ぶや流星、遠く近く絶え間なく馬啼の音は曼々として、衛士の寢覺の枕に落つ。欄に登りて遙に望めば、ほのぼのと白む東雲の空に輝くは背の星、閃くは鎗の鉾、揺曳く淡霧をつん裂きて桔梗の旗出づ／＼鎗おつ握つて叫ぶ蘭丸「明智殿……謀叛」

(明治三十九年九月「秀才文壇」六卷十九号、五行文学)

白露涼しき夏の晨なりき。

岩ばしる清水の潺々たる細湊に夢破れし我は、梢をはらふ蠅々の松風に衣の袖を揺らせつゝ、淡霽樹影を罩むる松原の辺に彷徨ひぬ、淡紫の神秘の帷、繚繞する東の空、明星の眸疲れて光淡はく、一輪の残月丘の松葉に葉隠れて、青光夢よりも淡し。

## 二

草葉に結ぶ白露を庭下駄に蹴立て、我は歩を川辺に移しぬ。今し明け離れゆく大空、雲の往き交ひ急はしく、涼風さはやかに樹々の梢に微妙の楽を奏て、野や、山や、森や、村や、尚夢の如く香渺たり。されども見よ、東天漸く紅を増して群雲乱るゝ所鮮紅燃えんとし、七彩の雲絢爛として目を眩せんとするを。紅の雲、あるは麗はしき桃色の雲々、瓔珞くづる、燦光は蒼天に絢爛の幔幕を懸けて、万象に流るゝ紅薔薇の燃ゆるん色の麗はしき哉。暁の男神、破邪の劍を閃めかして、争ふ魔雲を拂ひ散らせば、千条万条の金縷の征矢、一斉に映射して、森羅万象の夢忽然として覚め、にはかに勇ましく復活せんとす。噫莊嚴なる哉曙！清浄なるかな夏の朝！我魂今朝はしも恍惚体を離れ、混沌として、天地と同化し、精靈羈裡に脱し去らんとして模糊たり、白翅に御して夢幻の境に彷徨ひぬ。

夜は明けたり。日影麗はしく銀杏の梢にかゝりて、聳ゆる山の、繁れる森の、樹の、宮の、鳥の、態々の影は地に長く、細く、黒し。仰げば清き瑤瑤色の大空には、白象に似たる一朵の雲麗はしく流れて、天を、五輪のあらゝぎの頂には、鳶一羽、心地よげに輪を畫きつゝ飛べり。見渡す茫々たる平野は早苗の緑波寄せつ、返しつ、曙を辿る乙女の紅の練、菅の笠は淡霧に隠れて、朗らかなる鄙歌のみ幽に聞ゆ、緑滴る青葉若葉は丘より野に、野より森に、森より里に連らなり繁りて、清淨神の如き曙の景色は、神瑟薫する眼のレンズを透して、宛然として一幅の絵の如し。炊烟縷々として昇る松原の辺り、柘榴の花、籬に乱るる茅屋の影、一縷涼々として幽に響く笛の主や誰れ？

曙の寂寞をつんざく笛の、微妙なる響きに、暫し恍惚として夢路を辿る我が頭に、點々として落つるは清き松葉の雫、流緩やけき小川の水面さゝ魚躍るか澗刺として声あり。

青葉影、杜鵑の一声聞ゆ。

薄波しづかに紺碧の色を湛えて、眺めは広し三里の湖、神寂びたる丹朱の鳥居、若葉の影に仄見えて、男波女波の寄せ返す断崖は、朝日に匂ふ波の花紅し。と、汀の蘆洲揺らぎて漕き出づる小舟一つ。

一溜一波、静かに波を刻んで、船頭の松の如き腕に操つる櫂のまにまに、白薔薇くづるゝ波を舳に散らしつ、笠の上、蓑褌の袖、波の上、森の影、万象悉く濃き紅色に染められて、松の樹影に輪を垂るゝ老翁の姿

も神々し。

岸に行つみし我は絵筆執りて身構えぬ。絵の如き湖の景色は我が感興の琴線に触れて、颯とはとばしる紅の色、雪の如きワットマンに躍る景物や何？、山か、森か、青葉か、小舟か。

美しき夏曙の景色に憧憬れし我は、愛らしき妹の、朝餉を促すべく、後に立てるを覚えざりき。雞、五羽六羽けたたましくなく我が茅屋に、我は歡喜と平和に満てる我境遇を喜びつゝ、歩を移しぬ。小川の水車は緩やけき軋音を朝霧の裡に響かせて、葛からむ茅屋の籬には、白露涼しき朝顔の四五輪。

(明治三九年一〇月「巴峽」第十号)

### 呪ふべき星董主義

倉田百三

西洋文明が我國に傳へられて以来、欧米の新思想は滔々として我國に入り來りぬ、これ等の新思想は我鐵國の夢を醒す曉鐘なりき、而して我國をして、今日の如き文明を生まれめたり。然れども、この思想の潮流は、又種々の呪ふべき暗流を伴ひて止まざりき、拜金主義、利己主義、ニッチェ主義等は也、而して我所謂星董主義も、其最大なるもの、一也。星董主義はラテン民族によりて我國に入り來り、維新以前の儒教的道徳によりて束縛せられ、久しく其の思想を壓迫せられたりし我國人の眼に、この自由なる、この花やかなる思想は、如何に美しく映じたりし

ぞ、沙漠を旅するキャラバンにオアシスの影は天國とも見ゆべし、我も人も争ひてこの思想に接觸し、久しからずして、星董主義は滔々として、天下青年の心を蝕するに到れり。

星董主義の理想とする所は、美術生活なり、現世の快楽なり、漠たる空想に耽りて現實を没却し、美に心酔し、樂に感溺す、而して一朝生存競争の場裡に立こや、甘き空想は苦き現實と衝突して、忽ち破られ、終に煩悶し厭世するに到る、其處に努力奮闘の跡あるを見ず。天に輝く星を仰ぎてハイネの詩を誦するは、彼等の欲する所也、波荒き大洋に舟を浮べて、潮吹く大鯨と戦ふは、彼れ等の企つべき事にあらず、春の野に戀人と携へて、墓を摘むは彼等の好む所也、寒風氷る冬の朝、劍を揮うて武を練るが如きは、彼等の欲する所に非る也。近來、新聞紙上に屢々「赤門おしろい」の廣告を見る、嗚呼、我大学生の中には、白粉を塗りて婦女子の態を學ぶ者あるなり、この一事既に、近來青年の軟化し、婦女子化する事を証明して餘りあらずや、宜なる哉、學生墮落の聲の天下にかまびすしき事や。

男子は須く強かるべし、堂々たるべし、女子は須く優しかるべし、窈窕たるべし、男性と女性とは正に反對の方面に於て、各獨特の美を發揮すべきもの也、かの美しき藤は雄々しき松にからむが如く、白く、優しく白魚の如き女性の手と、黒く、逞しく、鐵の如き男性の腕と結ばしめてこそ、始めて美しく且自然なるコントラストは生ずるなれ。讀者よ、誤解する勿れ、余は美を呪ふものには非る也、義家が勿來の關の櫻花に歌を詠じ、八代大佐が月白き甲板下に尺八を奏せしが如き、何等の美談そや、これ勇と美とを兼ねたる者にして、實に詩の極致也。

然れども余は美に心酔する勿れ、感溺して己を忘るゝ勿れと言ふ也、現今の社會は詩を歌ふて暮らすべく、あまりに複雑也、花に埋れ蝶と戯

れて暮らすべく、あまりに激烈なれば也。最も星董主義の行はるゝ佛國の漸く衰へつゝあるを見よ、奢侈栄華に耽りし平氏の末路を見よ、今や世を挙げて墮弱となり、放佚となり、尚武廉潔の武士道の光は漸く消滅せんとする也。思ふに今日の平和は、武力的平和なり、軍艦と、軍隊とを以つて平和を買へる也、弱肉強食の慘劇は世界到る所に演ぜられつゝある也、この時に於て、將來の日本を繼續すべき青年が、チックに香水に身をやつし、安逸に耽りて可ならんや。

諸君よ、星董に憧憬するは婦女に委ねよ、美は女の生命なればなり、男子は須く、劍を愛し、バットを握れよ、男子の生命は競争なり、活動なり、奮闘なれば也。

(明治四一年七月「巴峽」第十二号)